「神のみこころに生きる」創世記１２：１０－２０。「さあ、天を見上げなさい」遠藤師著参照。１４・９・２１。序：「八方ふさがり」という言葉がある。どちらにも障害があり、手の打ちようがないという事態を、だれもが一度は経験することだろう。今、そうした事態に置かれているかもしれない。どう乗り切るだろうか。キリスト者は、神の存在を信じている。神は、私達と全く関係のない所におられるのではない。神は、小さな私達に個人的に関わって下さり、私達が祈る前から私達の必要を覚えておられ、私達に必ず救いの手を伸べて下さる愛に富んだお方。「あなたがたの思い煩いをいっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです」（Ⅰペテロ５：７）と聖書にある。素晴らしい御言葉である。聖書は、慰めに満ちた御言葉で溢れている。それは決して気休めではない。もし、私達が本気で神を信じるなら、こうした神の慰めの御言葉は、すべて私達のもの。この御言葉は、私達に対して神への信頼を求める。信仰とは、自分の精神力によって念じる事ではなく、人格を持たれるお方との親しい交わりに生きる事、このお方に心から信頼する事。神への信頼、それが聖書の語る「信仰」。神が生きて私達と共におられ、こんなちっぽけな私達にも関心を寄せていて下さり、そして私達の必要の為に、いつも待ち構えていて下さるという事実を、本日の礼拝の中で今も確認し、神を信頼したい。この神を本気で信頼するなら、私達は、決して自分自身だけで大きな問題に立ち向かおうとはしない。危機に直面した時、すぐに自分一人で、あせり、あわて、すべてをご存知の神に祈りもせず、動き過ぎてはならない。神を信じるとは、「人事を尽くし天命を待つ」ではない。まず、人事ではなく、まず神の助けを祈り求める。自分がなすべき事は何か、神に祈り尋ねる。神に頼り聞きながら人事を尽くす。それは決して消極的な生き方ではない。なぜなら、結果として、私達の愚かな判断による結末ではなく、全知全能の神の御業による驚くような祝福を見る事になるからである。　Ⅰ　神は、アブラムに現れ、彼を異教の地から導き、約束の地を目ざして歩むように指示された。彼への祝福の言葉があった。７５歳の彼と１０歳いほど年下の妻には、子供がいなかた。しかし、アブラハムは１７５歳まで生きたと記されている。この年齢でまだ人生の半ばに達していなかった。歩みを進める毎に少しずつ明かされていく神の壮大なご計画があった。神の祝福がアブラハムに及び、祝されたアブラハムによって、その子孫（キリスト）によって、世界が神の祝福を受けるという事。　　Ⅱ　神の祝福の約束をいただいて、自分の故郷を出発したアブラハムだったが、ネゲブに来た時、飢饉に見舞われた。：１０。そのままなら、自分達の食料が底を突くような事態。旅の目的を、改めて見直す機会となったことだろう。神は「私の示す地に行きなさい」と言われただけで、彼は、どこに向かうかを知らずに出た。「どこに向かうかを知らず」が、新訳聖書でも強調されている。そこには信仰を働かせる機会があった。出発当初の旅は順調であったと思われる。：７を見ると「主がアブラムに現れ、そして『あなたの子孫に、わたしはこの地を与える』と仰せられたとある。間違いなく主の導きの王道を歩んでいるという手ごたえ。思い切って出発して良かったという思い。しかし、喜びもつかの間、早くも、大きな壁にぶち当たる。神の約束は、どうなるのか？飢饉という自然災害は、現代の私達が考えるよりも、もっと深刻で、命に係わる恐ろしもの。この御言葉が私達に示している事＝神の御心という保証があっても、いつもすべてが順調とい

うわけではない。むしろ難しい課題に直面しながら、私達の神への従順と信仰が問われ、養われて行く。そして、試練、課題に対して私達が正しく応答するなら、それによって神との交わりが深められて行く。私達に仕えてもらう神信仰、御利益信仰か、私達が神の御心に従い神に仕える信仰かが問われている。私達の人生の中で、神の御許しの中で起こる様々な事を、良く観察しながら、性急な判断を下さずに、それをも主に信頼する機会と見なすなら、そうした経験は私達へのチャレンジとなり、ついには神が与える祝福の時となり得る。しかし、この時、アブラハムは、神に祈り御心を求める事をせず、飢饉の中で、自分だけで判断を下してしまう。エジプトへ下って行った。：１０。エジプトという国に対して、何の警戒もなかったわけではない。妻であるサライを奪おうとしてアブラハムを殺すかもしれない。正に「八方ふさがり」。後ろには飢饉、前には、殺害される危険。神に拠り頼み御心を求めないで、アブラハムの危機対策は→：１２－１３を読もう。ここには微妙な問題がある。アブラハムとサライは、異母兄弟であり、結婚した。アブラハムが、妻のサライを妹と言う事は、真理の半分を語り、半分を隠す事、やはり相手を欺く事。聖書は、正直に人間の弱さを記される。自己保身の為に苦肉の策を講じた一人の罪人。アブ荒ハムの欺きの結果、サライは宮廷に召し入れられた。パロは、サライの為に、アブラハムに良くしてやり、アブラハムは多くの財産を得た。：１４－１６。しかし、アブラハムは、その結果、愛する妻を失う事になる。悲劇的な事。妻を失えば、神の約束の実現も難しくなる。サライがパロと結ばれれば、イスラエルという民は、アブラハムとサライからは起こらない事になる。神の御心を求めないアブラハムの判断は神のご計画を阻止する障害となった。：１７－２０を読むと主の御介入のおかげで、アブラハムとサライは守られて送り出された事が記されている。この箇所の正しい受け取り方は、結果が良かった（それは、ただただ神の憐み）から、欺きも許されるのだではなく、大切な教訓の箇所として受け取る事である。「愚かにならないで、主のみこころは何であるかを、よく悟りなさい」エペソ５：１７。アブラハムが危機に直面した時、神ご自身に聞く前に、神ではなく人を恐れて、自分の判断、自分の考えをもって解決に乗り出した時に、神のご計画を非常に危うい状態に置いた。主にある私達の第一の願いは、私達を愛して下さる主のみこころがなる事。主の祈りで「みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ」と祈る。主の摂理と御計画の一端に加えられ、主の御目的が果たされる為、私達一人一人が、それぞれの場に置かれている。その時に、私達がどのように主のみこころを求め、お従いするかが問われている。主のみこころを第一に求める。自分の願いや実現や、自分の危機を回避するための判断ではない。主への信頼に基づいて、聖書を正しく読むことを通して、みこころを求め、自分に与えられた問題を通して主が私に何を求めておられるのかを考える。神の御言葉である聖書に本当に親しむ事が出来ますように。聖書的な視点から物事を見つめ、御言葉の視点から世界情勢を見つめ、そのような霊性が養われる時、御霊の一致が保たれる。この世の人が考えるように考え、この世の人が願うように願い、聖書に根拠を持たない事を見分ける力が養われなければ、世に流され、地の塩、世の光の使命を果たせなくなってしまう。祈り：神と深く交わり、御前に静まり、御言葉と御聖霊により、主のみこころを判断する、悟る心が養われ続けますように。